

親鸞仏教センター定例講座

『歎異抄』思想の解明（第Ⅳ期）

加来 雄之（親鸞仏教センター副所長）

『歎異抄』は、直弟子によって聞き取られた親鸞の生き生きとした「御物語」（宗教的語り）を今に伝えるただ一つの書です。

この親鸞の宗教的語りは、現代の危機的な思想状況のなかでどのようなリアリティをもつのでしょうか、またその語りを相続していくとはどのような営みであるのでしょうか。この講座では、そのことを聴講者の皆さまと共に解き明かしていきたいと考えています。

第Ⅰ期では、巻頭に置かれた「序」を通して、『歎異抄』における親鸞の宗教的語りの核心が「先師口伝の真信」であることを確かめました。

第Ⅱ期では、本文のうち第一章から第三章によって、「先師口伝の真信」を安心という視点、宗教的な信念の確立という視点から解き明かすことに努めました。

第Ⅲ期では、第四章から第九章が「先師口伝の真信」にもとづく生活とはどのようなものか、つまり起行^{きぎょう}についてあきらかにしているということ、そのなかでも第四章から第六章の三章が、念仏者がどのように他者に関わるのかについて、つまり利他^{りた}についてあきらかにしていることを確かめました。

この度の第Ⅳ期では、第七章から第九章の三章を取りあげます。第七章では念仏の生活に見出されるさまざまな障碍^{さわり}との関係が問われ、第八章では念仏と行・善との関係が示され、そして第九章では「念仏もうしそうらえども」にはじまる唯円の問いを通して私たちが念仏者として生きるときの不審の問題がとりあげられています。この三章を手がかりにして、「先師口伝の真信」が、念仏の行者（生活者）にどのような生の歩みを実現するのか、つまり自利^{じり}ということについて聴講者の皆さまと共に学んでいくことができると考えています。